

幼児期における平和教育(2)



莊 司 雅 子

前回には私は幼児期における平和教育が国際教育学会の一分科会としてとりあげられ、今後の研究課題になっていることについて述べた。更に幼児期に平和の心を育てることの必要性はすでに歴史的にはベスタロッチーやフリードリヒ・フレーベルが、また心理学的にはフロイドやピアジェが強調していることなどについて述べてきた。

なぜ平和教育が強調されたか

さて平和教育はなぜ今日、かくも重要な教育問題として国際的に考え出されたのであろうか。思えば一九六九年に、当時国連事務総長であったウ・タントが、次のような全地球的関心を強くひいた表明をしている。

「ドラマチックすぎるように思われたくないが、ただ、国連事

務総長として入手しうる情報から結論できることは、国連に加盟している諸国はおそらく今後十年間に、これまでの争いをやめ、軍備競争を抑制し、人間環境を改善するために、地球的協力を開始し、人口爆発を拡散させ、開発に対して必要な援助をするであろうということである。

そのような地球的規模の協力的体制が今後十年以内につくり出されないならば、私が言及した諸問題は、もはやわれわれがコントロールしえないものになってしまうであろう。」

ウ・タントのこの表明は、世界の人人々に直接間接大きな影響をあたえた。そして「地球的規模の協力的体制」をつくるためには、考えて見ると、それは根本において教育の力にまたなければならぬ。そこで世界の教師がまず手をつながなければならぬことが痛感された。とにかく未来の世代は、何を知る必要があるか、

今日の社会変化に対応するために、どんな種類の技能を身につけるべきかといった問題が今後ますます世界各国の重大な課題となるであろう。

平和教育が、強調されるようになったのも、こうした「地球規模の協力体制」の実現が急を要する世界的な課題を解決する必要があるからである。平和という言葉は、昔からいろいろ解釈されているが、民族や時代によってその解釈が異なっている。たとえば古代ギリシャでは平和の意味に正義と繁栄と秩序を含み、中国や日本では心の平静と秩序を意味している。このように平和は多様な含みをもって用いられる。また同じ平和でもたとえ心の平静といった個人内の意味であったり、あるいは個人と個人との間の平和、グループ内、グループとグループとの間、人種内、人種と人種との間、国内、国と国との間及び地球内の各地域の間の平和などが考えられる。では平和はどうすれば達成されるであろうか。

これに対しては二つの考え方があつた。一つは「戦争は人の心の中に始まる」という、ユネスコ憲章にうたわれているように、平和は個人としての人間の内部での変化を通して達成されるという考えである。この考えが従来もっとも支持されてきた考え方である。もう一つは、平和は個々人やグループの生活を支配している、人間組織の構造を変えることによって達成されるという考え

方である。またこれら二つを結びつけて考えるのを信じている人もいる。ところで世界のどの国よりも、平和教育の重要性を痛感しているのは日本国民ではないだろうか。特に日本国憲法は、平和憲法といわれている。日本国憲法にうたわれているように「自由と平和」とを愛する文化国家の建設が日本国民の理想である。そしてこの憲法の精神に即してつくられた教育基本法の前文にはこうある。「われらは、さきに日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人間の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。」これでもわかるようにわが国の教育は、もともと平和教育でなければならないといつても過言ではない。その平和教育を實際にどう実施していいかというところに、カリキュラムの問題がある。

幼児期における平和のありかた

平和教育は、家庭・学校・社会のすべての分野において行われなければならないが、ここではまず幼稚園・保育所における平和教育のあり方を考えてみよう。

争いの解決は、すべての年齢に関連するものである。しかもこれは両親や仲間や学校との結びつきにある子どもたちは、争いの

解決法をこれらの環境によって影響されることは当然である。そしてこの子どもたちが、やがて成長して共同社会で、県や市町村・国家や世界における戦争を意識するようになり、それに対応する仕方を研究するようになるであろう。それゆえにわれわれは早くから子どもに争いに対して公明正大に、そして正直に振る舞うように、そして争いを建設的に創造的に解決するように教えることは常に重要なことである。事実もしわれわれが子どもが現に当面している争いの解決、そして争いを起す原因を知り、更には争いを起さないように小さいときから訓練されていれば、成長の後には必ず争いについての分析のしかた、それに対する振舞い方及び解決法を学ぶことができるであろう。

これはアメリカのコネティカット州の二市の教師がイースターン・コネティカット州立大学、ジョージア大学、オクラホマ大学、ニューヨークのバンク・ストリート・スクールなどの教授たちと協同で次のような平和教育のプログラムの研究をした結果を報告している。そしてこれは幼稚園から大学までのレベルの幼・小・青年を対象に質問を発している。

ここではまず幼小（低）五―七歳の子どもの質問に対する答をかかげることにする。

○平和とは何か？

- 学校や教会で静かにすること
- 静かにすること
- けんかをしないこと
- 読書をする時はひとりであんとすわっていること
- 戦争のないこと
- 愛
- 家族揃って夕食をすること
- 平和な人とはどんな人か？
- 人が話をしている時におしゃべりをしない人
- 神さま
- 母さまと父さま
- けんかをしない人
- 困っている人を助ける人
- 他人に物を分ける人
- どうすれば平和にすることができるか？
- みんなが何かをしている時に、私たちがそれを邪魔をしないようにすること
- お父さんがニュースを聴いている時に邪魔をしないこと
- 親切にすること
- 平和のサインをつくること

●悪いことをしている人をとめること

●そんな人を裁判所へ送ること

これで見ると五歳―七歳の幼年は平和を平静と同じ意味にとっている。そして立派な人が平和的な人と考えている。また愛や食物や世話をする人々を平和な人と思っている。そしてお互いに親しく親切にすることが平和をもたらすことであるとしている。この報告でつけ加えていることは、この年齢の子どもは以上のような言葉で表現するよりも、もっとよりよく描画を通して平和の意味や平和な人々や平和への道などを表わすことができるという。

また実際に世界で起こっている争いや戦争を自分自身に、また家族に結びつけることによって、もっとよく平和の概念が覚醒されるであろう。子どもには平和の概念を正しくとらえさせる必要があり、たとえば平静・冷静を平和と同じ意味にとることは十分ではない。それはただ教師や親や先輩への従属だけを意味することになりかねない。けんかは生活の中に起こってくることであるから、幼児といえども早くから争いを解決することを学ばなければならぬ。

平和教育のカリキュラム(案)

平和教育は幼児期から始めなければならないが、実際にはどう

いうように進めればよいであろうか。平和教育のためのカリキュラムといったものは考えられるであろうか。以下は広島女学院ゲーンズ幼稚園が、一つの試案としてたてたものであり、昨年のものである。

I 人間関係

- 1、どのようにして自分のクラスの先生や友だちを知るか
 - 名前をおぼえる
 - 一緒に仲よく遊ぶ経験をもつ
- 2、どのようにして他のクラスの友だちを知るか
 - グループで遊ぶ
 - お花やおもしろいものを交換する
- 3、どのようにしてすべての人とも仲よくするか
 - いろいろなことに参加し、他のクラスの方と一緒にゲームをする
 - 他の友だちの会話を辛抱よく聞く
 - 困っている友だちを助ける
 - 病气している友だちに作品を送る
 - 意見が合わないときは、よく話しあう
 - 責任を分けあう

以上のプログラムのための教材としては次のものがあげられる。

△歌

あなたはどこですか

お元気ですか

先生と仲良く

お友だちになりましょう

私たちはお友だち

△ゲーム△ダンス△自己紹介△物語（太郎のお友だち、親切なお友だち）

II 感謝の心をあらわす

1、まわりのお友だちを知る

親の仕事の話しあう

2、他の人たちの仕事を知る

●何になりたいかを話しあう

●働いている人々を認め、その人々に感謝の心を示す

3、みんなのために働く人々をよく知り、かれらに感謝の心を

あらわす

消防署、郵便局、警察署、工場を訪ね、それについて話し

あい、画をかき

4、みんなのために生産されたものについて考える

イ、ままごと遊びをする

ロ、みんなのために働くことについて考える

●病気のお友だちを見舞う

●お掃除の手伝い

●植物や動物の世話

●ミルクや新聞や郵便物を家の中にもって入る、植木に水をやる

ハ、花の日、感謝祭

いろいろな人に花を送って感謝の心を示す

ニ、母の日、父の日

贈り物や招待で母や父に感謝する

以上のための教材として

△歌（お母さん、指遊び、誰が早起き、やおやさん、感謝祭）

△物語（ダーニーの贈り物、みんなの夢、郵便屋さん、パーティー）

ト）

III 世界を知る

1、自分の町を知る

●行事・歴史・産物・名所

2、他の市や町を知る

● 自分の町の地図を描き、他の町との関係を示す
3、日本を知る

● 国内旅行をしたお友だちから話をきく

4、いろいろの違った国を知る

● テレビ・書物・絵カード・産物・ことは・行事・気候など
を通して

● 地球儀や世界地図で日本と自分の知っている国々を見つ
ける

● 民族衣装や芸術を見、その国のことばをきく

● 外国人から彼らの国について話をきく

5、困っている国について知り、どんな助けができるかを考
える

(切手を集める、お金をあげる、手紙を出す)

以上のプログラムのための教材

△歌(わらべ歌、サモア島)

△ダンス(各国のフォークダンス)

▽物語(小さい黒人サム、中国の五人兄弟、スーホの白い馬、巨
大なカブ、十二月の贈り物、三匹の熊、町のネズミと田舎のネ
ズミ)

△その他(地図、絵ハガキ、地球儀、民族芸術、スライド)

このようなカリキュラムは、「戦争は人の心から起こる」という
ユネスコ憲章の言葉からすれば、まさに戦争を起さないような心
を育てるのに常に必要なことであり、特に幼児期の平和教育にき
わめて適切である。ところが平和教育に積極的に取り組むことに
なると、このような消極的なプログラムだけでは十分とはいえな
い。もっとはつきりと戦争の現実を知らせ、その悲惨さを感じさ
せるように教え、その原因をたずね、どうすれば戦争を起さな
くてもよいかを考えるように導かなければならない。そしてこれ
は学校教育では各教科を通して行えることであるが、幼児期では
主として家庭で親から戦争の体験をきかせることが必要である
が、保育所や幼稚園でもある程度のプログラムを組むことができ
る。

世界最初の原爆投下を受けた広島では数年前に平和教育研究所
が設立され、主として学校で戦争を教え、戦争を再び起させない
ようにするためにはどうすればよいか、について指導するカリキ
ュラム作製を試みている。その他若干の広島市内の保育所でもこ
のようなプログラムを組んでいるところがある。

たとえば仁保保育所(公立)では次のようなプログラムを実施
している。

1、原爆について考えたり話したりする

● 八月六日は、どんな日ですか

● 原爆記念日とはどんな日ですか

● このことを家で親にきくよう子どもに伝える

1. 戦争中の子どもたち¹⁾の絵本を子どもに見せる
2. 戦争中の子どもたち²⁾の絵本を子どもに見せる
3. 戦争の話や被爆の子どもたちの話をする
4. 被爆の子どもたちや原爆について絵を描かせる
5. 広島原爆記念館を見に行く
6. 被爆者から体験談をきく
7. 原爆病院へ被爆者を見舞う

以上のプログラムを保育所だけでなく、親に協力してもらい、家庭で折にふれて子どもに戦争の話や親類、親戚で原爆を受けた人々について話をしてきかせる。特に八月六日前後になると、子どもたちも原爆に関するテレビやラジオその他の行事について、見たりきいたりするので、この機会をとらえて、原爆の恐しさを知らせる。この保育所に子どもを入れているある母親の報告によると、子どももある日平和公園へ連れて行った時、子どもはいろいろの原爆記念碑をさして母に次のように言ったという。「お母さん、これは、もう戦争をしてはいけないということを教えるためのものよ」と。

原水爆や核兵器の恐しさはもうすでに幼稚園や保育所の四、五歳児に知らせてよいという研究がアメリカの幼児研究協会 (The Child Association of America) から出ている冊子³⁾「子どもと核兵器の恐しさ」にあらわれている。これは S・K・エスカロナ (S. K. Escalona) が執筆したものである。ここでは幼児を含めての、各年齢段階の子どもに核兵器の恐しさを教える必要があるとしている。幼児といえどもいろいろの恐しいものや事柄を知り、感じ、いだいている、という意味で、戦争一般の恐しさだけでなく、原水爆の威力や恐しさを知らせてもよい。

思うに、以前の子どもは兵器といえば、刀とか鉄砲とか軍艦と
思い、男児はそれで「ごっこ遊び」をしたものである。ところが
今日では、いろいろの科学兵器、ミサイル、原爆、水爆その他の
核兵器が、つぎつぎと考案され製造されている。しかもポータブル
のような運びやすいものが出ており、売買も容易になっている時
代である。こういう現実をわれわれは見落としてはならない。家
庭や保育所や幼稚園で、戦争の体験を語り、きかせ、その恐しさ
を感得させることは必要である。この幼児たちが二十一世紀の世
界をなすことを思う時、今こそ平和の芽生えを育てなければな
らないと思う。

(聖和女子大学)